韃靼勝敗記

三

へ遠13
142.3
3

遠へ13
1.428
巻 3

宮内省圖書寮

韃靼勝敗記巻之三

○艾丹落城の事

艾丹の書よいおそ小欲ありてそをとりはなつざりしに羅金法らそん毛係の疾付して都をく麻辣拔兒まらでるが計策小落入都をさして攻りしかば嚮嚮まる子侍國を飛り勢を纏めて麻辣拔兒まらでると一まつ茶よをそをして攻るとい へども城を要害堅固ゆへて出戰ふなくかくちりて防戰無りうそれば攻る度毎矢石を換ずるのそうて来ざ必傷の理を覺めざるる城中ふの羅金法らそんが敗走せを吟てよりかし恐怖のんお来ふく人心匿ふ茶て及へそれ

い麻辣援兒まぢる今ぞ遼汗の紇ろく而なりと味方の中か
拍馴くる遼兵二万俄勢を揚り出て遼汗を接け疾又絡
まきく兵くに引兵つせ出る勢を下知して城の三方より
尺地もなく押寄て石火矢鉄炮を打掛攻ると急
なり城中よりも大煩天炮を打出し防ぎ戦ひ寄よりは
負死傷多し と兵ども元来大軍なまび彩よを入替く
既ふ外廓の屏際をくく城の後陣の方より二三万去
軍勢を清の旗を指上て喀喇喀王の陣へ突掛り
ゝば韃の後陣大に騒きなゝ防ぎ戦へども南ぶくもあ
ざまび中を開く西ゝ北京勢遠さび中陣へ攻掛り勇

と震ひ是をも打破り寄よの陣をくく切抜け城を
くくと来り城ふ向つく大音上てはりゝゝ先達て和
京より南城後法ゝて向ひ羅金法ゝなり此度敗
軍して都ふ逃り帝の逆鱗ゝく既ふ一命をゝるく雪に
法大臣の情とんて今度艾丹ふ都き功を立ゝば一命を
中よ及ぶ本外安法れ遠あべゝゝと彩よの勢を賜り奔
ゝ迅一気と抛て韃勢を切靡け彩のごく勝利を得れば不
日よ欲拍喀喇喀王を付た韃勢を遠ん寄競ひ色
城中仏を安んじ都ふ力を合して出戦を逸らるべしと味
とりゝゝまび城拍吉仲良撞り是を見て万満れい

言葉うるはしくねぎらひて叔父羅金徒
達て殿軍の砲摩と雷ごんと彩る勇威を振い大軍を崩し
南城を敗ふよい雑組勢と付添んと走るにあらずと大ち
よろこびおもてもあらざれ敵を苦く城中勇を收ぶ時しるは
是又雑組勢麻辣援児ぐる指揮を受て一度よ撞と押
よ千ばい羅金徒らくん大音よ下知して敵城ふ勢の加りしを見帰まるゆ勿是共
一ぢよ攻付と羽扇を打振烈しく軍とをむまば双方共ふ
爰ぞ大ちゆの軍ちまと一足も引を手強ぎ一強よなるまとと
挑と戦ふ城ね孟仲良撞ようちまをんく士卒に下

知しく加勢の味方い定めて勇まつんよ雑の大勢組会
急よ押詰ればい羅金徒らくん いう程勇を震ふもの叶ふ逃
討く出く敵へとて城門八文字ふ開き突出ける時麻辣
援児ぐる計策の成不終い今此時ようと打も烈しく攻立
ふ羅金徒らくん無く却しうる事ちまば味方を敵方へ
飛と引知まい城兵中と取つて雑組勢ふ突入火花を散
して戦ふ羅金徒らくん下知して我よ勢と一ッよ纏
め陣中へ駆入と号しく太清の撞指和ちうぐり抜取
の櫓ふ火と発ち城に残りし兵卒此体を見く大ち
ゆどろさなぐ此所彼所より駆ちく戦ふと墨とも繰り出

る羅金法らきんぐ勝に城長尊う敵をくさ武を討ま寄い
ぶげ武ひまふ三者もなるうり羅金法らきんぐ勝の半を
分て大よの城門を堅まい城中を死ぬり双向ふ者い切例ー
女童い搦よより匠出を城ふ内ふい雑組勝城長と云る勇く
切結ぶ雑組の軍師麻辣接児ぐる敵ふ向つく大音上汝ふ後
と者ぐずや先ふ羅金法らきんと名乗ーい仕方の也ー者ぐそ
汝名を名引出ー城ハ内ふ仕方の和と尋ぐり何を遇ぐり合
戦をる中と熱勝一同ふ第ひぐる仕時城内ふ重仲良りゅう後
と振ぐり櫓くの燈よるを見く作天ー扨を麻辣接児ぐるに
出ーめるまーり安急中ぐるよーや軍令ぐるとも再び城ふ入

て廣羅金法らきんと刺違へ城を抜よ討死ーて武士の本
を尽るまと去華に下紅ー引起さんとーて味方を見まびたのま
雖ぐるハ人心今を分捨ひ勇猛く乱くぐるる広く屠笑
て扨捨僅ぞ残りぐる重仲良りゅう情く怨まどる強勇ぐく
残兵を集めく城門をく引起せい大よに焼残りぐる櫓の
上より廣の羅金法らきんく形ぐる出城内重仲良りゅう能く
取ぐる我くい軍師の下紅を交ふ家勢の表紙をーて海を
城印へ約出せーい皆漢ぐり鉄砲ーて矛く討死せーく大
音ふ吼ぐる弓鉄砲を打出ー素材ぐ宵ぐるよりい雑の大勢
海のごく攻寄る重仲良りゅう今い討死と見紙ーてぐる

太清の忠臣史丹の
城主孟仲良血戰
討死の図

タツミノ目

奈巫〜舞る敵の中へ突入く敵数十騎打死河陸羅王の
荒さるごく敵の中を竪横ふ駆ひふ薙易し〜を射
者もなり〜ふ軍命の尽るあうや行和ともく流矢来り
狗抜ふぐさと当る所ちまび悩り降ぢるより去迷抜サ
落く死〜ふり鎧組勢の中より主人走り寄て重仲良
良ぐ貫を打落〜ふく若上大音上艾丹の大将重仲
良を討死ふりと仲良ぐ将卒皆を呼てあるひる
敵対又刺遠へ乳軍の中に対ふくもあて主人も殺らぢ対配
ふれい鎧の勢一同ふ猪岡を揚ふり城中よりも同じく緑
波の勢を合せ城門を開さ出まへい皆城中に入く人馬の疲

労を休め軍師麻辣拔児を始めとして法名功ふ急ど
て熱責を行ひ吉ふ嗜嘔客主法名ふ向ひ軍議ある
に麻辣拔児ぐる〜を出くやるひ君義を挙あひ〜合
聲ふい猪ち流ふ降り向ふ訴敵なく既ふ北京第一の要地
なる艾丹も今行まふ入〜ふ者の威光ふ恐ま支那鎧
組中に敵ふる者ふ〜と思ども寄ふ古情独り清の宮組降参
の地ちまび見を敵ふ奪ふまんをと配く城長名力の及ん
丈け湯戦をべ〜又中京よりも狂文を面原うべ〜日を
延さび清国の軍勢見とちふん待ある時い急ふ攻ふる
雖ふべ〜れば吉ちる寄古情へ攻寄ちべ時日を移さど

ゑらべしとやこれば法王嗟咤喇嘛ざらい皆く思惟
てを武かり去ろ今思彩艾丹の女城と結り数城
とよろ又支那雑紙ろ欲する者ろれども未ご民ん嬢ろ
なるべ若も反ん者出来ら見とこの戦労空しか
らん綿る若い軍師とたよ南城よ山ん産ま立て思彩城
へも下知を伝へ民ん を情け長い小系より討よも向りぐ
防ざめろべし系い門下の勢を率て寧古塔ょ向い係
計とゆさよ入んと率ろまべ軍師麻辣拔思ぐも
此年ょ同じ軍後一度それば嗟咤喇嘛ざらいも八万の軍
勢ま寧古塔と攻べしとそ和ょとゑて

○北京英吉利ホ加勢をそろ事
咸豊二年六月ホ英吉利ホ仏蘭西ホ一緒ぐ支国攻く滔入今
既ホ艾丹を攻来ろ他く後法ろて羅金孤ろく孤向
しま支係の疫病とて却く事の破まろ敗わて中系
に逃ろ帰しば朝廷ろ諸々事内みて浮式の事ん寧古
塔より帰る来り嗟咤喇嘛ま 勢い虎大ろて艾丹も
攻れ第日寧古塔ホ攻入べき者を称ふ又南系の米民しも
勢い盛んろて攻難ま流江西諸元宗 も加勢を
そふ彩のごく南北ホ疫賊わろく民命庚ろの往ば
行きる征討して可なろんやと倫去ろれば庚戌ま七月

怖して言を出者なりし に欽差刑部侍郎席[illegible]
[illegible]作北狄防禦の要地[illegible]艾丹寧古塔[illegible]
吉林遼瀋[illegible]艾丹[illegible]既に敵に奪はれ今又
[illegible]の雄[illegible]寧古塔吉林も亦[illegible]故に
の勢を出さんぞ久しく抗[illegible]又内地[illegible]朱
天[illegible]威と震ひ先[illegible]の勇[illegible]敗し
加勢を[illegible]故に大敵[illegible]字古塔[illegible]の勇[illegible]
[illegible]方より戰ひを[illegible]只北狄防禦の[illegible]
[illegible]朱天[illegible]と先[illegible]抗ありて内地[illegible]
[illegible]狄自ら平[illegible]に[illegible]と来[illegible]

[illegible]人[illegible]を安んじ[illegible]孔平陳[illegible]
[illegible]曰く[illegible]趙元宗[illegible]
て朱天[illegible]と対[illegible]
[illegible]趙元宗[illegible]
[illegible]又[illegible]虎門[illegible]
[illegible]小攻[illegible]海[illegible]英
[illegible]利勢[illegible]朱天[illegible]
[illegible]孔平陳[illegible]
[illegible]一酒[illegible]
[illegible]一変[illegible]
[illegible]海の英[illegible]
[illegible]南方法國の大[illegible]

けしうぶ方平の時と遠ひ自ら小注を受来り」て勇名
の聞へある陳孫方文巖海ふ一ふ仏殺の遺名と共
に海ふる巖海と共に英吉利艦隊陳留ちんを浸へ咸
豊三年八月号北京を打立て急ぐ分け英吉利を
先年ふ来ふ和睦の後虎門廈門宝海ホの地を賜りも敏
と築き平生に名士と亜て雅客のもり巖室ろろ山に内
地名礼起り国中鼎の沸ぐごく騒ぐ」えれが不意乃礼
接あうんるを恐き者を惜し軍艦火気あるまで多く
集め基場ふく」えん廈壓と居く海岸ふ心を砲り大砲慶賈
徒ふく」を宝海ふ立てく虎門廈門ホの法高敏を指揮し

要害ありしを考ざりしに」は日小京の使義巖海艦隊
陳留ちんと手勢一ふ仏殺ふて作浦より海礼数艘ふ打来
宝海さして漕ぎ寄せ英吉利の幸見」は勢を見て大砲慶賈徒
ふく」ふ彩と苦しうぶ亜ちふ海岸と暮り礼紛所ヶ巖海
ぐんが紅号をく漕ぎ寄る英吉利勢ちい欲の寄ると既ヶ
大筒を放さんとせしに大砲慶賈徒ふく制し留めて欲礼
を僅ふ古艘と見へ残ふ軍艦ふ」ぬく法を宝ろ礼ば海さ
湄あるべし要害を固め是ふく事の也と礼同して後ふ打
拂へさりのろうば打拂へ海ふく無恐の拳動を為さば後の
患と」出さんと好を静めく紛所より巖海艦隊通

陳留にて海岸より咸豐帝より英吉利
へ勅旨の旨ありて陳孫文嚴海が条りる地を告
ぐ英卒ありと大ひに苦ぐ慶賈法国と雪て士卒を下
知して兵器を收めしめ嚴海を重へられが嚴海通詞
を以て中入るくい内地小茶天法しゅてん兵を起し南京小居
り又雜組と嘯嘯事を及逆して今帝の震襟安
うべ四海を文武百官を引き軍評定あるる小秋へい
一ひを呈向南京の陸地を僥あの巡撫を向を海上より
黄國の兵を以て加勢として黄河により攻めるべしとの
勅旨ちうと速られば慶賈法勅旨の評定を四文中べ

られども下支甲比丹等へも申少せ其上勅義申上べし
皆肝心相違下さるべしして嚴海
さしめ吉小甲比丹数度を以集の評定するい今日小系が
勅使到来して加勢を乞ふいで勅義すべきや是下答ろ
思ふ意きりなく速べしとるられが業務遠いつ
て中ろうい我英吉利を清の屬國とあるべ是を
高の如あるのを小系のあるを上を千の渭法」時世を絶
ろうを吉清の主威地ところへ虚改を重しく說吏稽を殘能
を以て以若孔あるを起るちまべ等く密みを類へ
門地を平表ちべき方へ加るるを吉あるへんと速られ

趙元宗
南京勢を
破る圖

ダウ三ノ十

が為國孫の曰く我又思ふ所有り俗令を清の威
義へ服ふ所ふ乞ひ奴を約るとも回文行ひ難きを一旦物を
小法に加勢をもつて義を図くみして変を部
督慶賈統に我国を小亦に対し恐りなく又恐るべし
共無南のはしこのみをもつて忠孫しくがやごく加勢
せざるんが為するを加へくは後代を英國の恥辱とるべんあ
らば此度の物を以て無じて軍艦を出すべし と流涕一度して
歳海と元の席へ請じ加勢の義承諾仕る又本國へ書
紙をかくやをもつべし太子紙に注を十六日なるべ二日
と義て十八日を經べ本國の大軍遠國に来るべし来い三

所の勢を集めて不日に黄河口に押寄んと物言せしべ
歳海大小怪い別を生て小亦さして降りる
○趙元宗南京を攻る
天德帝も南京を立て仁政を行ひ國中の攻撃する
者を極育せし程に降を乞ふ者多くうるべ交小江西饒州の
巡極趙元宗先に天德帝を俗平万年の地に
て防ぎたくうひしに金戦利らくして軍勢多く失ひし べ
北京に加勢を元滅くし南京に押寄先敗の恥辱を言んと
大軍にて押寄ると雪ふ南京に入て べくるる加大
元帥法武龍 地理と星り寒國奇に行文て戦ふべ

と濃とまべ法度弘
あるん軍師をとゝめ
へめく北向い敵を
うふ後中ゆいんえ
路止ぐらく別ち三
ち三方の勢を指揮
諸元宗四方敵勢を
賀よ南蛮衆と揉へ
を敵ゝむるよ
二ヶ所方ヨ二ヶ所浅陣を

と若しゝべ諸元宗是を聞て此軍法い我勢敵の先
陣小南しべ敵後くゝ引取くべし後よ急くをきべ双方の
勢を以く横合より突掛り強猛さん結構なる強り方我軍
勢の半を引て志先小後へ廻ニ廻ニ小突入べし敵後て引取
べ左右を顧ぐて志一文字小本陣を打破るべし半の勢い
ア引よ列ね後より押出すべし戦ひ半に及ぶ時よ急よをで
却く敵を引包ム力を尽して攻討べ能令剛敵とつ共忍
くに見らんと軍法を変めく押出しを付と名ゝく鉄戦
し絶まべ手い小数戦を交へ暫し戦ふ乃へ急よ遠
まべ弦道弘が先ま義くに引取く諸元宗

採配打振るめく〳〵とひかれ出でまづ為く切〳〵る僥勢勇
をもんで進み寄れく攻付まづ張道弘が勢に度踏
にかく迎ふる元宗猛も烈〳〵長まづ不陣をく
迎来る此時張道弘採配を振て味方を招けば左右
陸小縅へ〳〵に陣の兵諸元宗が勢と突て掛る諸元宗
も採配を振て縅へと呼ふ分ちかしも怯まず戰闘に
後ろより〳〵と縅へ僥勢張道弘が勢を引色
んで討んと張道弘が大勢事と打返して色めく所を中
より浮先尖く突て出れかりい縅兵為と切るるぞ張道
弘が勢途を失ひ敗て本陣へなだれ懸る張道

弘歯切を噛て怒と大勢の乱を立るおなじく
して立直るを紛れ共小崩まて走るぞ諸
元宗も猛小勢く長張く此一挙に南家とも攻寄
逆櫓の根と引と縅兵為と討を浩武縅りまい張道弘
が出陣の迫て諸勢向い張道弘諸元
宗が歌よにあくびぶを敗軍をぐ〳〵敵ひどんいあるぐ
うんと鄭金徐達ふ二方の横合とうへ後陣として
ト打しむ為ねを為ぐて為る所を張道弘が敗軍
の為と引合軍師の沛撫を感ぐつ、敵ち鄭金徐達
を二手と分き味方の敗軍い中を走り後詰りする僥勢

の中へ西も振ぜ討入らり結元宗も歓よ彩よの加りるとよい長討打ちをと楽しよ多く軍と優め元の時五く
功りる張宝弘ちうう元あ和の救ひを済く軍勢をあ和に委ね重そ分いよ勢ぞりを引連南京よ功り武能ぶ
げあよ出く素石才ふ〜て打る大級を元上軍兵を多く
共に羅万配ふ南る冠し〜く軍法を正しぬく武能ぶの日
軍の指級い者尾の者なりはぞ行よ掛ゆる後日よ功を元
て僕ひぬへ帝の代新い素能よ牧牛べし〜く被よ功り
休名し〜ぬへと法道弘ちうう恩を謝してぞ功りる又鄭金てん
徐復よい享国府よ海を元軍師の出陣を結つ歓ね結元

宗も一旦を指州と済ると長ども浩武能りぶが智
謀を強き事よ陣ゆを固め日を送りる武能ぶも今
暫し後明用奉彩りる改ふ深ちきれりを故のすく
まぬを幸ひとして戦ひを始ぬ故のすく
軍勢の要ふの下知を伝へ射法とうとうう
○英吉利勢黄河口よ寄る事
去る長崎湾の英艦ふ彼ちし歳滑ぶを日数を経て和泉
ふ功り英吉利合体の旨ふ委細ふ物言をれば咸豊帝
を更なり諸長大よ勇を英吉利加勢して黄河口進安よ
押寄ば南京うとび勢を和て黄河口よ向ふべし南京軍

勢の減ずる時趙元宗及び段喜り又山西海の大
き劉璋同澤海の大尊曹寛のあれい小系よた
義富さ勇ろまび見へも物役をとられ糧し合せく海
陸三方より接こ討ちにせび朱天法しゅん
と安ろうんとそ則ち劉璋り曹寛めあれへ物役
と要ろさる宣海ろい慶賈徒とく小系加勢の物産をれば
先はるをを四へ作へさせ幸ろ急ろまび取ろと行ろ遣よ
なく要ろよ慶門虎門ろよ指探して大軍艦二十八艘小
軍船二十二艘都合六十艘軍勢合して二万五千人へと
三ようふけ一ろい乗弟逸大小軍艦十八艘軍勢八

千人大頻加農臼砲天地ろ二百門一ろい孫四孫大小
軍艦十八艘軍勢八ろ人大尉千二百門一ろい都督慶
賈徒自ら一万九ろ人大小軍艦二十四艘大尉二千
門と俗へ黄河口さして押寄る南京の軍師港武能
ろくも見と知り天徒帝のあろ如く奏しろるを
此度英吉利小京小合体して不日ろ黄河口ろ押寄る乃
旨を告ぐ徒ろ淮安城の勇士勇猛なるとも軍勢さ
ぜ一ろ孫降参せ一ろ丸ろ肉ろも計りぐく強
味方に来ぐ軍艦の設け迅ろの戦ひを勝利見来なけ
まび此ろ事伯玉ぐへ作付ろまろび神色自在の術たん

黄河口の戰ひ李伯玉謀て英国の軍艦を奪ふ図

歓を靡ふせんと欲ひうるべしと申されば天徳帝
左と同じゆへ別当伯玉ふ命せらる李伯玉
諸し抑天羅瑠璃換おと共ふ用ゐして兵乗七万
餘騎にて黄河の清淮安ふ出張く陸を布き淮安城門
へも出張と西ゞ重李伯玉味方の諸将を召して告
て曰く歓い航海の術ふ秀て海上の盤引自在なるを
上陸せばゆふ兵者共歓安い陸ふ立て勇力あるを
海上ふ浮んで味方の内ふ御航海ふ別らる者あり
樂ふ歓するゆ能へまゞ操る万我等術を以て歓と戦
ろい安られども味方ふ軍艦を忘なくう

ざひ為て後日の軍用ふ備へん宜しく歓を敵さ上陸さ在所
端より生捕偽く艦と奪へんとて航海ふ別らる者を撰と
出一人として他へ重勢軍三万に余き嬢毒の落ふ蛇形
の海と張り毒場く〳〵西洋流の大角数千挺を仕付け
結ふ英吉利船い歓ふ先と越まゞ軍艦を漕連て黄
河口へ押寄るに李伯玉ふ陸より大角を打掛しゆ
英吉利船も同じく迎農日懸ふを打掛まゞ元来李伯
玉りく が軍配して蛇形ふ備へし陣を構へば蛇矢の然なく
手ふ大煩を打掛ふ上ようい陸くに艦と寄め大煩を撃く
打うける李伯玉りく附ふいうしと味方ふ下知を伝つまゞば

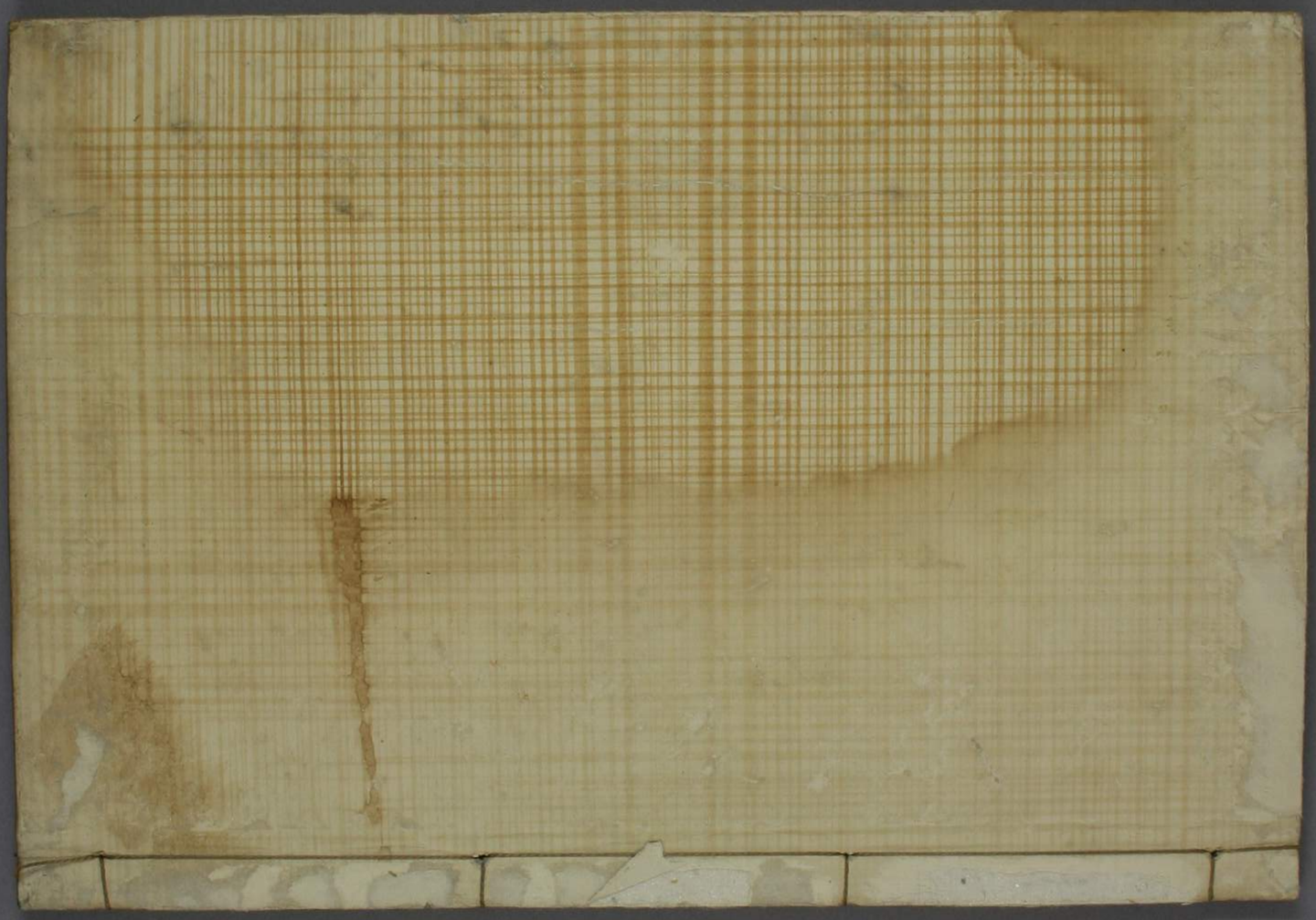
陣を張と引返く英勢陣を初りて歌い大音を発
まして迎うるぞ此勢ひよ陸しして南帝と奇兵と勇をん
で漕者喇叭を投下しく我一人と上陸を此時事伯玉
天を仰ぎ般文を唱ふまい青天忽ち変じて黒雲を中ひ
光波く雷を流もぐごく英勢い胆天を奪れば都督廣
賈法とくと大ふ怒ろまども味方を励し大音とよて今彩
暗歌のごく天変あまでも歌も亦同あるべし味方を
掛合とく歌を付と減多生に強る石思議ちるる南
帝勢い共しも此巻くと初りて青天忽ち吳なるるく
働さ自由なり英勢の罵るを聞て呼うれども無軍とも

事氏しりの妙術あるを少初るの なるべ先たん事氏
の妙術ろうと心内指号を約事伯玉 先ず撫を 統領
ふ別し者をして歌紅ふ楽移らしの胸紅い悪く大紅ひ
流く遥の海上ふ巨らしの又陸地の味方を麾き英勢に美
状もるく切掛らしむるふ英幸い喜歌ふ迎る心地して 猛
猛ひ只叫ぶ勢のを志るぞふ戦へば同士対する者も多うり
此戦ひふ英勢大ま対き武を迎て海岸ふ漕ちあるひを
寡石を彩を打破り周章するの大方ろうに此時事伯玉
りて又般文を唱ふまい墨雲忽ち去く青天と成て英表利
きく 勢味方を顧まで大ま対き歌い信く勢ひ盛んふ切るに

で大将慶賈徒らに大小百餘辺をさして出せば士
卒年ゝ疲しべき皆一同に出走り船小舟んとすれば船
を求ぬ故の如く旅て遠の沖に後明の旗指物を押立ち英
勢遠を見ひ沈よりい南京勢雲霧のごとく臣掛まべ何も
へ乗る及りるく往方尽て魂を抜刀洗脆を投出し乗
拝誓盟して降を乞ふの形勢ろまべ書伯王ぎく是を乃く
味方を制し奴戦を収めさせ自ら居麦の上勢を〔具〕英
勢小を付西何をんて乗るよ郎督慶賈徒らの差くて云
ゆう我国元より天徳帝てんとくへ対し然ともなく又北京へ対
し恐もちろんども什仕小京帝より加勢を乞ろくにより

沒来西高の勢をあるとん一味し什黄河より押寄しちり
数き飛を免しめぐ天徳帝てんとく小二心ろく属しきろん
去ぐう先達て本国へ小京加勢の義をやんまりして然べ
不日小大軍をん攻め来らん是お恐ふ為り亜し来れ今更
いんとも乞べきやう〔な〕行る写本国の軍船面ゆ来る付
我小什度免さるく数恐に命よ智く理解を法き英国く
天徳帝てんとく小属しきろ什らいやうんとやそれべま
伯王りく是を呼て先降糸の宣例ろまべとて孫名一万
雑人武器を悉く元上柳天寵りてう小二万の勢をかけ
へて南京よまり軍の為作を奏せしめ我牙いる万の勢を沒

へて幕びゝ奏る英氣を昂ぐんと黄河ふ立陣を

難難勝敗記卷之三終

ダウ三ア二十